

## 音楽科における小中一貫教育に関する研究(1)

～「共通事項」の取り扱いを中心として～

竹井成美\*<sup>1</sup>・藤本いく代\*<sup>1</sup>・阪本幹子\*<sup>1</sup>・菅 裕\*<sup>2</sup>・稲野さやか\*<sup>3</sup>

岡元雅代\*<sup>4</sup>・谷口朋美\*<sup>4</sup>・山下さちか\*<sup>5</sup>・松田美由紀\*<sup>5</sup>

Research on the Consistent Education  
of an Elementary School and a Junior High School in Music Class (1)  
Research on the Handling about Musical Elements

Shigemi TAKEI, Ikuyo FUJIMOTO, Mikiko SAKAMOTO, Hiroshi SUGA,  
Sayaka INENO, Masayo OKAMOTO, Tomomi TANIGUCHI,  
Sachika YAMASHITA, Miyuki MATSUDA

本学部では、平成23年度から文部科学省の予算措置を受け、「小中一貫教育支援プログラムの開発と実践～小中一貫教育に関する総合的研究とそれを基盤とする新任教員養成及び現職教員研修～」をテーマとした3年間の研究プロジェクトが始まった。この研究の背後には、「義務教育の質の保証」が求められる中、宮崎県は早くから小中一貫教育を導入した先験的研究実績があるものの、小中一貫教育を対象とする学術的研究成果に乏しいことがある。本学部の研究は、教育現場に役立つ研修プログラムの開発と、本学部学生と大学院生の教員養成の視点から小中一貫教育の理解を促す教育プログラムの開発を目的としている。

折しも、平成23年度から新小学校学習指導要領等が全面実施され、小学校学習指導要領第2章第6節「音楽」においても、いくつかの改善の具体的事項が示され、これに合わせて教科書が新たに改訂された。平成24年度からは、新中学校学習指導要領が全面実施され、新教科書が誕生する。

本研究は、本学部の3年間の研究プロジェクトに沿って、小中一貫教育の視点から小学校音楽科と中学校音楽科において何を柱に、何をどのように指導して行くかを研究することを目的としている。

### 1 小中一貫教育を視野においた、新出「共通事項」の取り扱いについて

今回示された新学習指導要領「音楽」における改善の基本方針は、以下の4点に集約される。

- ① 音楽のよさ・楽しさの感受、思いや意図をもって表現・味わって鑑賞する力の育成、音楽と生活との関わりに関心をもち、生涯にわたって音楽文化に親しむ態度の育成、などを重視。
- ② 子どもの発達段階に応じ、各学校の内容の連続性に配慮して、歌唱、器楽、創作、鑑賞

\*<sup>1</sup> 宮崎大学教育文化学部

\*<sup>2</sup> 宮崎大学大学院教育学研究科

\*<sup>3</sup> 宮崎大学教育文化学部附属中学校

\*<sup>4</sup> 宮崎大学教育文化学部附属小学校

\*<sup>5</sup> 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

ごとに指導内容を示したこと。小・中学校では、表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を「共通事項」として示したこと。

- ③ 創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では「音楽づくり」、中学校では「創作」として示したこと。鑑賞活動では、根拠をもって自分なりに批評する力の育成を示したこと。
- ④ 国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽の指導の一層の充実を示していること。

本研究では、これらの改善の基本方針の下に示された改善の具体的事項の中でも、小・中学校で新出し、小学校の低・中・高学年で積み重ねられた学びが中学校へと確かに受け継がれるべき「共通事項」に注目して研究することにした。これは、本学部のプロジェクトが目的とする、小中一貫教育の理解を促す教育プログラムの開発にも資すると考える。

今年度は、来年度から完全実施となる中学校音楽科を見通しつつも、小学校音楽科において、新出した「共通事項」をどのように取り扱うべきかを考えることから始めることにした。

#### (1) 小学校音楽科における「共通事項」について

「共通事項」については、音色、リズム、速度など「音楽を特徴付けている要素」や、反復、問いと答えなどの「音楽の仕組み」を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさなどを感じ取ること、「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」を音楽活動を通して理解することが示されている。

「音楽を特徴付けている要素」は、低学年では、音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、中学年では、低学年で示したものに加え、音の重なり、音階や調、高学年では、中学年までに示したものに加え、和声の響きであることが示されている。

一方、「音楽の仕組み」は、低学年では、反復、問いと答え、中学年では、低学年で示したものに加え、変化、高学年では、中学年までに示したものに加え、音楽の縦と横の関係であることが示されている。

#### (2) 本研究で取り上げる歌唱共通教材における「共通事項」の取り扱いについて

##### ～「拍」の取り扱いを中心にして

本研究では、本学部のプロジェクト・小中一貫教育の理解を促す教育プログラムの開発を視野において、どの小学校にあっても、どの教科書であっても、共通的に取り上げることが想定される歌唱共通教材の中で「共通事項」を順次取り扱っていけば、小学校6年間で上記「共通事項」の内容を網羅できるのではないかと考え、歌唱共通教材における「共通事項」の取り扱い方を研究することにした。

#### ① 新教科書における歌唱共通教材での「共通事項」の取り扱い方について

まず、本年度改訂された新教科書では「共通事項」がどのように取り扱われているかを分析した。教育芸術社、教育出版、東京書籍における歌唱共通教材での「共通事項」の扱いは、次表のとおりである。



各教科書によって、歌唱共通教材における「共通事項」の取り扱いは異なっている。同時に、歌唱共通教材だけを教科書に示されたまま取り扱う場合には、文部科学省が示している上記「共通事項」を網羅することはできないことが明らかになった。とくに本学部附属小学校で使用している教育芸術社の教科書に示されている内容をそのまま取り扱うとすると、歌唱共通教材だけでは、「共通事項」の、速度、音の重なり、和声の響き、音階や調、フレーズを、6年生までに網羅できないことになる。

その「共通事項」に関しては、他の表現領域と鑑賞領域の中で計画的に取り扱うことが望まれる。

#### ②1年生の歌唱共通教材「ひのまる」で「拍」を教えることについて

次に、こうした教科書分析結果を踏まえて、歌唱共通教材を中心にした場合、どの教材を使って、どのような順番で、どのように「共通事項」を取り扱うべきかを考えた。

その結果、小中一貫教育の9年間を見通しつつ、共通事項の「拍の流れ」に先立ち、小学校1年生の歌唱共通教材「ひのまる」を使って「拍」の存在を教えることから始めることにした。音楽が生じると同時に始まる「拍」の存在は、9年間の最初の段階で教えるべきであると考えたからである。

歌唱共通教材の取り扱いについては、附属小学校が使用している教育芸術社の1年生の教科書の目次には、「こころのうた」として、「ふるくから うたいつがれ、これからも うたいついで いきたい うたです」と記されている。しかし、楽譜が掲載されている頁には、「ひらいたひらいた」には、「みんなで あそびながら たのしく うたいましょう」、「かたつむり」と「うみ」には、「はくに のって、からだを うごかしながら うたいましょう」、「ひのまる」には、「うたの リズムを かんじて、のびのびと うたいましょう」というめあてが記されている。本研究で取り上げる「ひのまる」は、教科書では「のびのびと歌うこと」をめあてにした展開が期待されている。

そもそも教育芸術社の教科書は、「うたで なかよしに なろう」「はくを かんじとろう」「はくに のって リズムを うたう」「けんぼんハーモニカを ふこう」「いろいろな おとにしたしもう」「ようすを おもいうかべよう」「おとの たかさに きをつけて うたおう」「たがいの おとを きこう」「おんがくを たのしもう」という単元構成になっており、1年生の最初の段階で、「歌の楽しさ」に続いて「拍」に注目した単元になっていることが注目される。

その単元で取り扱われているめあてや楽曲などは次のとおりである。

表4：単元；「はくを かんじとろう」

めあて	鑑賞活動	表現活動
はくに あわせて てを うたう り する ことが できるかな	「さんぽ」	「なまえあそび」
	音楽にあわせて手拍子を打つ活動	児童の名前や3文字の言葉を使って、拍を手拍子で確認しながら4拍目で“はい”と言う活動

表5：単元；「はくに のって リズムを うとう」

めあて	表現活動	鑑賞活動
はくを かんじながら う たったり リズムを うっ たり する ことが でき るかな	「じゃんけんぼん」「げんこつ やまのたぬきさん」「ぶんぶん ぶん」「ことばあそび」	「しろくまの ジェンカ」
	○たん・たん／たん・うん／ ○たん・たん／たん・たん／た ん・たん／たん・うん／ ○たん・たん／たん・うん／ た・た・た・た／たん・うん／ のリズムを打つ活動 ○上記リズムに合う言葉さがし	○たん・うん／たん・うん ／たん・たん／たん・うん／ のリズムに合わせて手拍子や タンブリンを打つ活動

これらの教材の間に、歌唱共通教材の「かたつむり」と「うみ」が挿入され、「めあて」に「はくに のって、からだを うごかしながら うたいましょう」とある。

しかし、「かたつむり」と「うみ」は、むしろリズムに気をとられて、1年生が歌いながら拍を感じる楽曲としてはやや問題があるのではないかと、むしろ、四分音符と四分休符だけでできている「ひのまる」の方が、「拍」を感じながら歌い、「拍」の存在を学ぶのに適している教材ではないかと考えるに至った。音楽が始まると「拍」が一定の間隔で生じ、音が鳴り響かない休符にあっても「拍」は存在していることを教えるのに適した教材でもあると考えたからである。

## 2 「共通事項」の「拍の流れ」を意識した授業実践

～歌唱共通教材「ひのまる」において「拍」の存在を意識した授業実践を中心として

### (1) 学習指導案作成と授業実践

以下のような指導案を作成し、平成23年11月4日(金)に、1年1組で授業を行った。授業内容は、複数のビデオカメラで録画し分析時の資料とした。

指導案の作成に当たっては、「拍」の存在に気づかせることを第一にした。

## 第1学年 音楽科学習指導案

授業提案者 岡元 雅代

## 1 題材の目標

A 表 現 (1) ア	【音楽への関心・ 意欲・態度】	○ 拍の流れを感じ取って体を動かしたり歌ったりする活動に進んで取り組もうとする。
	【音楽表現の 創意工夫】	○ 拍の流れを感じ取り、曲に合うように体の動きや歌い方を工夫することができる。
	【音楽表現の技能】	○ 拍の流れにのりながら、フレーズや音程、曲の盛り上がり気をつけて歌うことができる。
	【鑑賞の能力】	○ 拍の流れに気をつけながら、曲の気分を味わって聴くことができる。

## 2 題材名

はくのながれにのって

## 3 題材について

本題材は、拍の流れに気をつけながら表現活動することをねらいとしている。

教材曲「ひのまる」は、4小節を1フレーズとし、すべてのフレーズが同じリズムから構成されており、拍の流れを感じ取りやすい曲である。また、3フレーズに向けて音が高くなっていくことから、曲の山をつけて歌うことができる。「しろくまのジェンカ」は、「タン(ウン)タン(ウン)タンタンタン」というリズムのくり返しがわかりやすく、体全体で拍の流れやリズムを感じながら歌うことができる曲である。低学年のこの時期の子どもは、音楽に合わせて体を揺らすことを好む。そこで、体の動きを伴った表現活動を取り入れる必要がある。

このように、音楽を形づくっている要素を感じ取って演奏することは、音楽の基礎的な資質や能力を育てる上で意義深い。

## 4 子どもについて

本学級の子どもは、音楽が流れると自然とロズさんだり、歌詞の表す情景を想像したりして、楽しんで音楽活動に取り組んでいる。

題材「おんがくのひろば」では、わらべ歌や馴染みのある曲に合わせて歌いながら体を動かしたり、歌に出てくる動物の真似をしたりして表現活動を楽しんだ。また、題材「いろいろなおとにしたしもう」では、楽器の鳴らし方を工夫しながら星の様子に合う音を見つけ、それを音楽にして歌と組み合わせる活動を経験してきた。

しかし、音楽の流れを意識しながら演奏することや、周りとの声を合わせて歌うことについては十分でなく、自分の感覚で演奏している様子が見られる。また、友達とのかかわりの中で互いの意見を大切にしながら表現を高め合うことについてもこれからの指導によるところが大きい。

## 5 自信をもって学び合う子ども育成するための手立て

段 階	生み出す	○ 子どもがよく知っている「けんけんば遊び」をとおして、教師の打つ拍に合わせて体を動かすおもしろさを体感することで、拍の流れにのって演奏することへの興味関心を高めることができるようにする。
	挑む	○ 拍の流れを視覚的に理解できる掲示物を利用したり、音の動きを体で表現したりする活動をとおして、拍の流れにのりながらフレーズや音程に気をつけて演奏することができるようにする。
	生かす	○ 聴く視点を明確にして友達の発表を聴く場を設定することで、拍の流れを意識しながら聴くことができるようにする。また、拍の分割を表した掲示物を使って既習の曲をふりかえるようにすることで、音楽には拍がわかれているものがあることを理解できるようにする。

6 自信をもって学び合う子どもを育成するための指導計画 (8時間)

階	主な学習活動及び学習内容	教師のかかわり	具体的な評価規準
生 み 出 す  (1)	1 遊び歌をし、拍の流れに合わせて活動することへの思いを膨らませる。 <1時間> ○ ケンケンバ遊び  2 題材のめあてと学習の見通しをもつ。 ○ めあて はくについてうたったりからだをうごかしたりしたのしもう。	○ 遊び歌として親しまれている「ケンケンバ」を、教師の打つ拍に合わせて体験させることで、拍の流れにのることへの興味関心を高めることができるようにする。 ○ 黄色と赤のケンステップを用い、「ケンケンバ」と「ウン」を色分けして踏ませることで、「 」の流れを視覚的に理解できるようにする。	○ 拍の流れに合わせて体を動かす活動に進んで取り組んでいる。 (関・意・態)
挑 む  (6)	3 拍の流れによって歌う活動に取り組む。 <3時間> ○ 「けんけんば」 ○ 「ひのまる」 ・ 拍の流れ ・ 曲の山  4 拍の流れやリズムに気を付けて表現する活動に取り組む。 <3時間> ○ 「しろくまのジェンカ」 ・ 拍の流れ ・ リズム ・ 体の動き ○ 「ジェンカ」	○ 打楽器で拍を打ったり、拍の流れを意識できる掲示物を提示したりすることで、休符があっても拍は続いていることを捉えられるようにする。 ○ 音の高低に合わせて体を動かす活動を取り入れたり、音の動きを矢印で提示したりすることで、曲の山がつくられていることがわかるようにする。  ○ ペアで、拍を打つ役と体を動かす役に分かれて活動する場を設定することで、互いの拍の感じ方や動きを確かめながら表現活動ができるようにする。  ○ ジェンカのリズムに合わせて動きを工夫している子どもを取り上げることで、拍の流れやリズムによって表現するおもしろさを感じ取ることができるようにする。	○ 拍の流れに気を付けながら、正しい音程で歌っている。(技能)  ○ リズムに気を付けながら歌ったり体を動かしたりしている。(技能)  ○ 音楽に合わせて歌い方や体の動きを工夫している。(創意工夫)
生 か す  (1)	5 学習のまとめをする。 <1時間> ○ 発表会 ○ 拍の分割について	○ 鑑賞の視点を焦点化することで、動きや演奏が拍の流れに合っているかどうかということを意識しながら互いの表現をみることができるようにする。 ○ 拍の分割を表した掲示物を使って既習の曲をふりかえるようにすることで、音楽には拍が分かれているものがあることを理解できるようにする。	○ 拍によって歌ったり体を動かしたりすることのよさを感じながら聴いている。 (関・意・態)

## 7 本時の目標

- 拍の流れに気を付けながら歌うことができる。

## 8 指導過程

学習活動及び学習内容	教師のかかわり	用具準備物
1 本時学習について話し合う。 ○ 本時学習の確認 ○ 本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">はくのながれにのって「ひのまる」をうたおう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ これまでの学習を振り返るようにすることで、拍の流れにのって歌うという学習のめあてをつかむことができるようにする。</li> <li>○ 国旗の画像を提示したり、国旗についての話をしたりすることで、楽曲への興味関心をもつことができるようにする。</li> </ul>	キーボード 国旗の写真
2 学習の見通しをもつ。 ○ 学習の流れ <ul style="list-style-type: none"> <li>・ うたう</li> <li>・ はくのながれにのって</li> </ul>		
3 「ひのまる」を音程に気を付けて歌う活動に取り組む。 ○ 音取り ○ 無伴奏で <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 速さを変化させて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師が少しずつ範唱することで、音程に気を付けながら歌うことができるようにする。</li> <li>○ 前奏のみ演奏し、無伴奏で歌ったり、速度を変えて歌ったりする活動を取り入れることで、拍の流れにのって歌うことの難しさを感じられるようにする。</li> <li>○ 無伴奏で歌うとどこが難しかったのかと問うことで、休符の取り方に気を付ければよいことに気付くことができるようにする。</li> </ul>	歌詞カード
4 拍の流れにのって歌う活動に取り組む。 ○ タンバリンの拍に合わせて ○ ペアで ○ 全体で <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 録音</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師がタンバリンで拍を打ち、それに合わせて歌う活動を取り入れることで、休符を意識しながら歌うことができるようにする。</li> <li>○ ペアで、歌う役と休符で手拍子をする役にわかれて活動する場を設定することで、互いに拍の流れを感じる事ができているかを確かめられるようにする。</li> <li>○ 自分たちの歌声を録音し、最初の歌声と比較聴取することで、学習の成果を感じられるようにする。</li> </ul>	タンバリン       録音機器 ラジカセ
5 本時のまとめをする。 ○ ふりかえり ○ 次時の見通し	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習の成果を感じている子どもに意図的に感想を発表させることで、拍にのって歌うことのよさを共有できるようにする。</li> </ul>	

## 9 本時の評価規準

- 休符を意識しながら、拍の流れにのって歌っている。

(技能) 【演奏・発音】

### 3 授業実践についての考察～「拍」の存在を意識した指導ができたかを中心として

授業後に、授業者を中心に、録画と授業を観察した教員などによって授業を振り返り、以下のいくつかの課題を抽出した。

#### ① 教師が範唱する場面

「ひのまる」の旋律を初めて覚える場面では、教師がピアノ伴奏をしながら範唱しているが、すでにここで教師が望ましい拍感で、しかも身体的動きを伴いながら行っている。一般的な指導方法ではあるが、この授業では、児童が自ら「拍」の存在に気づくことをねらいとしていることからすると、音の高さの推移だけを覚えさせるために、あえて無伴奏による範唱の方がふさわしかったのではないか。

#### ② 教師が意図的に速い前奏を弾き、それに引き続き無伴奏で児童に歌わせる場面

児童の歌の速度が次第に遅くなっていく場面で、教師が前奏のときの速度でピアノを演奏しながら「このくらいで弾いてたよ」というのに対して、児童が「速い」と答えている。さらに教師は「これに合わせて歌っていたかな。(中略)速いと「拍」の流れにのって歌えないの」と続ける場面。「これに合わせて」という発語が児童に伝わるには、「拍」の実体が内的なメトロノームであることを児童が理解したときであるので、この発語の意味は児童には伝わらなかったのではないか。あるいは、この場面では、児童は教師の発語に対して、「拍」の存在よりも、むしろ速度に反応しているのではないか。

#### ③ 教師が意図的に四分休符をなくして切れ目なく歌い、休符の存在に気づかせようとする場面

最初、児童が、歌詞の切れ目と休符の存在とを混同して反応しているのではないかと考えたため、教師は歌詞の切れ目と本来ある四分休符のところで手を叩くように指示し、休符の存在を意識化しようとした。休符の存在に気づかせる効果的な方法ではあったが、「拍」の流れにのってタイミングよく手を叩く児童と、「拍」とは無関係にゲーム感覚で手を叩いていると思われる児童がいた。「拍」の流れにのって身体的動きを伴ってタイミングよく手を叩く児童に注目して、みんなに、この授業のねらいである「拍」の存在に気づかせる場面を作れば効果的であったのではないか。この授業では、休符の存在に気づかせるのがねらいではなく、あくまでも「拍」の存在に気づかせることが主眼であることを意識しておく必要があるのではないか。

他方、タイミングよく手を叩く活動は低学年には難しい場合もあるので、他の方法も考えてみる必要があるかもしれない。なぜなら、この授業に先立ち、幼稚園の年長児に「ケンケンパ」の活動を試みたが、運動機能には個人差がみられ、音楽的な「拍」を感じて活動しているかを判断することは難しいことが明らかになったからである。

児童に「拍」の存在を気づかせる他の方法として、教師が一定の「拍」を刻まずに歌う事例をいくつか提示し、児童に何かおかしいと気づかせる方法も効果的であるかもしれない。

#### ④ 「拍」の存在を花と蝶のイラストによって教える場面

アメリカのシルバー・バーデットのテキストに使われている「拍」の存在を教える手法を用いたもので効果的なイラストであったが、今回の一連の説明では、花が「拍」を表していることが児童には伝わりにくかったのではないか。休符の部分でも、「拍」は存在することを説明する効果的な発語の研究も必要ではないか。

#### 4 今後の課題～小中一貫教育を視野においた「共通事項」の取り扱いを中心にして

本研究の授業実践は、行事等で11月にしか行えないこともあったが、上記のように、教育芸術社の教科書の最初の単元には「拍」について学ぶ頁があり、1年生の最初の段階で、むしろ教科書の内容にしたがって活動させながら、教科書で挿入している歌唱共通教材「かたつむり」と「うみ」ではなく、本研究で取り上げた歌唱共通教材「ひのまる」を使って「拍」の存在に気づかせる方が、効果的であったのではないかと考える。

本研究で浮かび上がったさまざまな課題を踏まえた上で、小中一貫教育を視野において「共通事項」を取り扱う場面では、小学校1年生の最初の段階で、以下のように「拍」の存在を指導する展開が考えられる。

- ① 「さんぽ」のCDにあわせて、足踏みや行進をする。一定の速さで刻まれる「拍」の存在を身体運動を通して感じさせる。可能であれば、「さんぽ」の速度を変えて身体運動をさせる。速度が変わっても、「拍」は一定の間隔で刻まれていることを確認させる。
- ② 一定の「拍」を刻む教師の手拍子に合わせて、自分の名前や友だちの名前を言って返事をする。返事は“はい”ではなく、“は！”と言う。“はい（2音節）”と言わせないのは、この後に展開する文字の数（音節数）と「拍」の関係からリズムの存在に気づかせるためである。また、教科書では、例えば4拍目で手拍子を打たない部分が示されているが、この場面ではむしろ、絶えず一定の手拍子を打ちながら名前と返事を当てはめていく方がよいと考える。
- ③ 一定の「拍」を刻む教師の手拍子に合わせて、4文字の言葉を当てはめて行く。「はなたば」「おんがく」「かみのけ」などを連続でとなえる。この活動後、「ばなな“ほ！”」のように、3文字の言葉を当てはめ、4拍目で“ほ！”と言って、次の3文字の言葉を次々に送って行く。この場面でも、絶えず一定の手拍子を打ち続ける。この活動を通して、「拍」の存在をしっかりと体感させる。ときどき、速さを変えてみる。速さを変えても、「拍」は一定の間隔で存在していることを確認させる。②の場合と同様、教科書のように4拍目で“はい（2音節）”と言わせないのは、この後に展開する文字の数（音節数）と「拍」の関係からリズムの存在に気づかせるためである。
- ④ 「ひのまる」を無伴奏で歌唱する。その間、教師は手拍子を打ち続ける。旋律を覚えたら、児童も手拍子を打ちながら歌唱する。「ひのまる」は、上記③の4文字と3文字と“ほ！”を組み合わせた構成になっていることに気づかせる。また、休符の存在と休符であっても「拍」は存在することを感じさせる。その後、「拍」を示す“花”と四分音符を示す“蝶”のイラストを提示し、音楽が始まると「拍」が生じ、休符があっても「拍」は存在することを視覚的に確認させる。  
また、速さを変えて歌う。速く歌っても遅く歌っても、一定の「拍」が刻まれていることに気づかせる。
- ⑤ 一定の「拍」を刻む教師の手拍子に合わせて、「い・る・か」「はな・た・ば」「おん・が・く」「ほー・ほ」などを、繰り返しとなえる。1拍の中に、1つ言葉（1音節）が入っているところ、2つ言葉（2音節）が入っているところ、また、2拍伸ばしているところに気づかせる。あわせて、ここにリズムの違いが生じていることに気づかせる。
- ⑥ 共通歌唱教材「うみ」を無伴奏で歌唱する。その間、教師は手拍子を打ち続ける。旋律を覚えたら、児童も手拍子を打ちながら歌唱する。「うみ」は、上記⑤の活動と同じ構成

になっていることに気づかせる。

- ⑦ 歌唱共通教材「ひのまる」と「うみ」2曲を使って、「拍」の存在と、あわせてリズムと速度について理解できたという段階までに導くことができると考える。

来年度も引き続き、小学校1年生の最初の段階で、「拍」の存在とリズム、速度について、上記手順で教えることを試み、その成果を検証することと、その他の「共通事項」の取り扱い方、来年度誕生する中学校の教科書と「共通事項」の取り扱いの分析などを通して、小中一貫教育を視野においた音楽科教育の望ましいあり方を考えて行きたい。

#### 主要参考文献

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社、2008年
- 小原光一他監修『小学生のおんがく1』教育芸術社、2011年
- 宮崎大学小中一貫教育支援教育プロジェクト「小中一貫教育フォーラム：小中一貫教育をどう進めるかー新しい義務教育の創造をめざしてー」2011年